

## 24. 農学研究科

I	農学研究科の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	24- 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	24- 4
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	24- 4
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	24-15
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	24-23

## I 農学研究科の教育目的と特徴

農学研究科は、昭和 47 年度に修士課程を擁する大学院として発足した。昭和 56 年度には、農学部、工学部、理学部を母体とする大学院自然科学研究科（後期 3 年の博士課程）が設置された。平成 19 年度には、独立研究科である自然科学研究科から一般研究科の農学研究科（博士課程前期課程・後期課程）に改組し、翌平成 20 年度には、学部を改組して BMD（学部・修士・博士課程）一貫の 3 専攻 6 講座体制とし、現在に至っている。



### （教育目的）

1. 本研究科は、食料・環境・健康生命に代表される農学の諸課題を探究することによって、持続共生社会を構築する高度な技術と知的基盤の創成に貢献することを目的としている。
2. 神戸大学の「教育憲章」に基づいて策定された現行の中期目標においては、「人間性」、「創造性」、「国際性」、及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成するため、国際的に魅力ある教育を展開する。」との目標を掲げている。農学研究科では、これに基づいて学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）を定め、「人間性」「創造性」「国際性」及び「専門性」を備えた人材の育成を教育目的としている。
3. また、そのような人材を養成するため、本研究科では、学際的視野・国際的視野の涵養、プレゼンテーション能力の向上に重点を置いた教育課程を編成している。

### （組織構成）

農学は、食料・環境・健康生命に代表される諸課題にさまざまな方法論でアプローチする総合科学である。本研究科は、専門性を備えた人材を育成するため、3 専攻 6 講座の組織構成をとっている《資料 1》。食料環境システム学専攻は「工学」と「経済学・社会学」を軸に、資源生命科学専攻は解析対象に係る「動物学」と「植物学」を軸に、また生命機能科学専攻は「化学」と「生物学」を軸に組織されている。これらを、附属食資源教育研究センター、地域連携センター、食の安全・安心科学センターが専攻横断的にサポートする体制を構築している。

《資料1：組織構成》

専攻	講座	教育研究分野					
食料共生システム学専攻	生産環境工学講座	水環境学	土地環境学	施設環境学	地域共生計画学		
		農産食品プロセス工学	生体計測工学	生物生産機械工学	生物生産情報工学		
	食料環境経済学講座	食料経済学	食料生産管理学	食料情報学			
資源生命科学専攻	応用動物学講座	動物遺伝育種学	動物多様性利用科学	生殖生物学	発生工学	栄養代謝学	
		分子形態学	組織生理学	感染症制御学	動物遺伝資源開発学	細胞情報学	
	応用植物学講座	資源植物生産学	植物育種学	森林資源学	園芸植物繁殖学		
		園芸生産開発学	園芸生理生化学	熱帯有用植物学	植物遺伝資源開発学		
生命機能科学専攻	応用生命化学講座	生物化学	食品・栄養化学	天然有機分子化学	有機機能分子化学	環境分子物理化学	
		植物機能化学	動物資源利用化学	微生物機能化学	微生物資源化学	生物機能開発化学	
	農環境生物学講座	土壌学	植物栄養学	植物遺伝学	栽培植物進化学	細胞機能構造学	
		環境物質科学	細胞機能制御学	植物病理学	昆虫分子機能科学	昆虫多様性生態学	
附属食資源教育研究センター							
地域連携センター							
食の安全・安心科学センター							

(教育上の特徴)

1. 博士課程前期課程では修士論文、博士課程後期課程では博士論文の提出を必須とし、複数の教員による研究指導に力を注ぐとともに、厳格な審査のもとに学位を授与している。
2. コアカリキュラムの設定：研究科内横断型のコア科目「食料・環境・健康生命」を開講し、必修化している。さらに、本コア科目の一つとして「英語編」を開講している。
3. 学際的視点の涵養：本学の自然科学系5研究科（理学、工学、農学、海事科学、システム情報学）と共通の授業科目を選択必修科目とし、学際的視点の涵養を図っている。
4. グローバルリーダーの育成：フィリピン大学ロスバニョス校と提携し、学生派遣、講師招聘等を行って、グローバルな視野を持つリーダーの育成に取り組んでいる。

(想定する関係者とその期待)

本研究科の教育に関する関係者としては、在学生及びその家族、修了生及びその雇用者、並びに農学系の学術団体を想定している。これらの関係者からは、「幅広く深い教養、農学分野における深い学識と高度で卓越した専門的能力、論理的思考能力、ならびに国際的教養を兼ね備えた人材の育成」を期待されている。

## II 「教育の水準」の分析・判定

## 分析項目 I 教育活動の状況

## 観点 教育実施体制

(観点到に係る状況)

教育目的に即した組織編成については《資料1》参照。農学研究科の教員の配置状況は、《資料2》のとおりである。各専攻のカリキュラムにおいて主要な授業科目は必修に指定され、専任の教授・准教授・助教が共同で担当している。選択科目も主に専任の教授・准教授・助教が担当している。専任教員1人あたりの学生収容定員は3.4名で、適切な規模である。

《資料2：教員の配置状況（平成27年5月1日現在）》

専攻	専任教員数										非常勤	
	教授		准教授		助教		計			男	女	
	男	女	男	女	男	女	男	女	計			
食料共生システム学専攻	9	1	8	0	2	0	19	1	20	2	0	
資源生命科学専攻	11	1	10	1	5	1	26	3	29	3	0	
生命機能科学専攻	17	0	11	0	5	3	33	3	36	0	0	
食資源教育研究センター	1	0	2	0	2	2	5	2	7	0	0	
地域連携センター	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	
合計	38	2	31	1	14	7	83	10	93	5	0	

入学者の選抜については、農学研究科として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料3》、これに基づき、多様な入試を実施している《資料4》。博士課程前期課程入学者選抜では、専門科目・面接に加えて、平成27年度から全ての専攻でTOEFL-ITPを導入した。一方、外国在住の受験生に対しては、e-mail interviewによる国費留学生、外国政府奨学金留学生特別選抜のシステムを整備し、多様な人材の確保に努めている。

博士課程後期課程では、社会人学生を受け入れることを目的に、大学設置基準第14条に定める教育方法の特例を実施し、平日の授業等に参加することが困難な社会人に対する時間外の授業を可能とするとともに、勤務先における研究を可能にしている。

学生定員と現員の状況は、《資料5》に示すとおりである。博士課程前期課程の充足率は、年度によって若干のばらつきはあるものの最近では定員の1.1~1.2倍で、ほぼ適切な範囲に収まっている。平成25年度には、志願倍率の高い生命機能科学専攻の定員を7名増員した。博士課程後期課程においては、専攻による差があるものの、生命機能科学専攻は100%の充足率を維持するとともに、食料共生システム学専攻において、社会人学生が増加傾向にある。

《資料3：農学研究科アドミッション・ポリシー》

博士課程前期課程

農学研究科博士課程前期課程では、それぞれの専攻分野において幅広い知識をもつとともに、問題解決能力と学際的視点をもった創造性豊かな人材を養成することを目指しています。このため、農学分野の堅実な基礎学力をもつ人、論理的な思考能力に優れた人、農学に対して高い学習意欲をもつ人、知的好奇心に富み農学の探究に情熱をもつ人、さらには、産業社会や公的機関で農学の知識をさまざまな形で活用したい人などを受け入れます。

博士課程後期課程

農学研究科博士課程後期課程では、それぞれの専攻分野において高度な専門性と幅広い視野をもち、創造性と独創性を兼ね備えた人材を養成することを目指しています。このため、農学やその関連分野について修士レベルの基礎学力をもつ人、論理的な思考能力やプレゼンテーション能力に優れた人、知的好奇心に富み農学の探究に情熱をもつ人、研究者、教育者として活躍したい人、あるいは産業社会や公的機関で現に活躍中で、さらに高度専門職業人へのキャリアアップを目指したい人などを受け入れます。

《資料4：入学者選抜方法と入学定員》

博士課程前期課程					
専攻	入学定員	一般選抜 (4月入学)	外国人留学生特別選抜 (4月入学)	外国政府等奨学金受給外国人留学生特別選抜 (4月・10月入学)	
食料共生システム学	27	27	若干名	若干名	
資源生命科学	42	42			
生命機能科学	57	57			
合計	126	126			
博士課程後期課程					
専攻	入学定員	一般選抜 (4月・10月入学)	外国人留学生特別選抜 (4月入学)	外国政府等奨学金受給外国人留学生特別選抜 (4月・10月入学)	学術交流協定大学からの外国人留学生特別選抜 (4月・10月入学)
食料共生システム学	6	6	若干名	若干名	若干名
資源生命科学	8	8			
生命機能科学	11	11			
合計	25	25			

## 《資料5：学生の収容定員と現員の状況》

博士課程前期課程		(単位:人, %)		
専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率
食料共生システム学	平成22年度	54	59	1.09
	平成23年度		60	1.11
	平成24年度		53	0.98
	平成25年度		57	1.06
	平成26年度		60	1.11
	平成27年度		55	1.02
資源生命科学	平成22年度	84	104	1.24
	平成23年度		97	1.15
	平成24年度		101	1.20
	平成25年度		101	1.20
	平成26年度		91	1.08
	平成27年度		80	0.95
生命機能科学	平成22年度	100	137	1.37
	平成23年度		121	1.21
	平成24年度		120	1.20
	平成25年度	107	128	1.20
	平成26年度		129	1.20
	平成27年度		121	1.13

博士課程後期課程		(単位:人, %)			
専攻	年度	収容定員	現員	うち社会人	定員充足率
食料共生システム学	平成22年度	18	12	1	0.67
	平成23年度		10	1	0.56
	平成24年度		13	1	0.72
	平成25年度		10	3	0.56
	平成26年度		11	4	0.61
	平成27年度		15	2	0.83
資源生命科学	平成22年度	24	22	10	0.92
	平成23年度		23	12	0.96
	平成24年度		20	10	0.83
	平成25年度		17	7	0.71
	平成26年度		19	6	0.79
	平成27年度		15	0	0.62
生命機能科学	平成22年度	33	32	8	0.97
	平成23年度		38	10	1.15
	平成24年度		40	11	1.21
	平成25年度		37	12	1.12
	平成26年度		33	11	1.00
	平成27年度		31	1	0.94

本研究科の講義・カリキュラム等の教育システムの改善は研究科教務委員会が、学生生活のフォロー・改善については学生委員会が、入学及び学位の判定は教授会が行うが、さらに自己点検・評価委員会を設置し、《資料6》に示す手順で教員の研究・教育・大学運営・社会貢献活動の評価を行っている。教育の評価においては、授業担当コマ数、指導学生数等を基礎に、さまざまな要件を加味した基準を定め、厳密な評価を実施している。

《資料6：教員活動評価の手順》

- 4～5月：自己点検・評価委員会は、教員活動評価の方法を決定する。
- 5～6月：農学研究科事務部が、農学研究科所属教員に関する教務情報（教育）、総務係保有情報（管理運営）、KUID入力情報（研究）を「農学研究科 教員活動評価書（個人用）」に記入し、各教員に送付する。
- 6月：各教員は「農学研究科 教員活動評価書（個人用）」の内容を点検・修正するとともに「社会貢献」を記入し、事務部に返送する。
- 6～7月：農学研究科自己点検・評価委員会は、「農学研究科 教員活動評価書（個人用）」の内容を評価し、「教員活動評価結果通知・報告書」に評価結果の原案を記入する。評価結果の内容を農学研究科企画調整室が点検する。
- 8月：研究科長は、「教員活動評価結果通知・報告書」を各教員に送付する。教員は意見があれば、申し立てる。
- 9月：研究科長が意見に対して説明する。また、最終評価結果をとりまとめ、結果の概要を学長に報告する。
- 10月：自己点検・評価委員会は、教員活動評価の方法を点検し、問題点を取りまとめ、次回の教員活動評価法を改善する。

また、教職員の意識向上のため、ファカルティ・ディベロップメント(FD)研修会を行っている。平成25年度からはこれに特に力を入れ、さまざまな観点から研修を行っている《資料7》。平成27年2月には、「神戸大学のグローバル化について」と題して、研究科長が大学をめぐる昨今の情勢、英語のみで卒業・修了できるコース設置の重要性について説明した。これを嚆矢として、英語コース設置の必要性・意義・可否についての議論が本格化し、平成30年度を目途に大学院英語コースを設置する方向で設置準備委員会が組織された。

さらに、学生からのコメントを講義・カリキュラムの改善に役立てるべく、学生による授業評価アンケート、修了時アンケートを実施している。修了時アンケートでは、外国語によるコミュニケーション能力がより身に付くカリキュラムを望む意見が多く見られたため、平成25年度にはフィリピン大学ロスバニョス校(UPLB)と連携して、学生をUPLBに派遣する「UPLB アグロサイエンス実用英語演習」を、平成26年度にはUPLBの教授を神戸大学に招聘して実施する「Intermediate Techniques in English Speech Delivery」、その翌年度には「Comprehensive Techniques in English Speech Delivery」を開講し、学生のさらなる英語能力向上が期待できるような体制へと改善した。

《資料7：FD研修会実施状況》

年月日	題名と講師	参加人数
平成22年11月19日	1) 平成21年度授業評価アンケートについて 2) 授業ピアレビューの経過報告	58
平成22年12月21日	「実務家から見た農政と次世代の人材」 講師：岡島正明氏（元農林水産省総合食料局長）	38
平成23年 7月15日	アカデミックハラスメント防止に関するDVD上映	60
平成24年 8月10日	「科研費」の最近の動向について 講師：農学研究科 宮野 隆 副研究科長	73
平成25年 6月21日	「個人情報の保護及びSNSに関する説明」 講師：人間発達環境学研究所 長坂耕作 准教授	60
平成25年 7月19日	「兵庫県の農業施策について」 講師：秋吉秀剛 兵庫県農政環境部農政企画局長	68
平成25年 9月 6日	「博士論文のリポジトリ公表について」 講師：附属図書館情報管理課 兵頭尚恵 電子図書館係長	67
平成25年10月18日	「オープン連携創造本部」 講師：連携創造本部 内田 一徳 本部長	67
平成25年11月15日	「神戸大学男女共同参画の取り組み」 講師：男女共同参画推進室 岡田 順子 副室長	63
平成26年 6月20日	「学生の就職活動時期の変更について」 講師：城 仁士 神戸大学キャリアセンター長	78
平成26年 8月 8日	「科学研究費補助金の申請について」 講師：宮野 隆 農学研究科長	77
平成26年 9月 5日	「学生生活実態調査について」 講師：杉本敏男 農学研究科学生委員会委員長	75
平成26年11月14日	「オーサーシップ：学術誌 Editor 組織の見解とガイドライン」 講師：バイオフィン研究センター 吉川 潮 教授	77
平成27年 1月 9日	「共同研究契約のひな形改正について」 講師：連携創造本部 開本 亮 教授	83
平成27年 2月 9日	「神戸大学のグローバル化について」 講師：宮野 隆 農学研究科長	80
平成27年 4月17日	「クレスト・さきがけ申請の説明について」 講師：学術研究推進本部 吉田 一 特命助教	87
平成27年 5月15日	「ハラスメントについて」 講師：宮野 隆 農学研究科長	75
平成27年 6月19日	「CREST、さきがけ第1期の応募状況の報告と、第2期に向けて」 講師：小川 真人 理事	71
平成27年 7月17日	「神戸大学学習管理システム(BEEF)の活用について」 講師：大学教育推進機構大学教育研究推進室 米谷 淳 教授	80
平成27年 9月 4日	「初年次セミナー・アクティブラーニングについて」 講師：大学教育推進機構大学教育研究推進室 近田 政博 教授、山内 乾史 教授	71
平成28年 1月 8日	「キャンパスライフ支援センターについて」 講師：キャンパスライフ支援センター 村中 泰子 特命准教授	87

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

入学者の定員及び選抜方法については、社会動向や学問領域の発展を鑑み、適宜見直しを図っている。教員の自己点検・評価を綿密に行うとともに、FD研修・学生アンケートを利用して不断に教育の質の改善に取り組んでいる。特に、学生からの要望により整備した「UPLB アグロサイエンス実用英語演習」等においては、UPLB と緊密に連携して、学生の派遣、講師の招聘を行い、教育のグローバル化に努めている。

以上のことから、本研究科の教育の実施体制は、期待される水準を上回ると判断する。

**観点 教育内容・方法**

(観点到係る状況)



平成 19 年度に農学研究科のアドミッション・ポリシー《資料 3》、平成 23 年度にディプロマ・ポリシー (<http://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/policy/diploma-policy/grad-agr.html>)、平成 24 年度にカリキュラム・ポリシー ([http://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/policy/cp\\_graduate.html](http://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/policy/cp_graduate.html)) を策定し、教育課程を見直すとともに、体系的な教育課程を構築した。博士課程前期課程・博士課程後期課程では、講座ごとに定めたカリキュラム・ポリシーに沿って、専攻共通のコア科目や複数の教員で構成する少人数ゼミ形式の授業科目（特定研究）等に重点を置いた教育課程を編成している。全講義のシラバスは、ウェブサイト上に公開しており、講義目的、各回の授業内容、成績評価基準、準備学習、教科書、履修条件等について具体的な指示を行っている《資料 8》。

《資料 8 : シラバス一例》

開講科目名	食料・環境・健康生命（環境編）		
担当教員	小野 雅之、草苺 仁、金子 治平、田中丸 治哉、	開講区分	単位数
	川村 恒夫、田中 勉、豊田 淨彦、庄司 浩一 他	後期	2単位
<b>授業のテーマと到達目標</b>			
<p>&lt;授業目的&gt;          農学のキーコンセプトである「食料・環境・健康」に対応した研究科内の横断型のコア科目であり、専門性と学際性の育成を目指す。食料共生システム学専攻が中心となって開講するものであり、食料生産基盤の構築に向けた環境工学と機械工学及び食料の流通・消費環境の改善に向けた食料経済学の融合による食料共生システムの発展について理解を深める。</p> <p>&lt;到達目標&gt;          (1) 専門的原理と学際的知識に基づいて考察できる。          (2) 農業に関する土木工学的・機械工学的基礎理論に基づいて食料生産基盤の構築に向けたシステムを設計する基本的能力を得る。          (3) 食料の流通・消費環境の改善に向けた食料経済学を理解するための十分な基礎知識を得る。</p>			
<b>授業の概要と計画</b>			
<p>食料共生システム学専攻が中心となって開講する科目であり、食料生産基盤の構築に向けた環境工学と機械工学及び食料の流通・消費環境の改善に向けた食料環境経済学の融合による食料共生システムの発展について論述する。特に、食料の生産環境、流通・消費環境に焦点を当てた講義を行う。</p> <p>第 1 回 地盤の液状化と農業用パイプライン 河端俊典          第 2 回 水と土と水利施設 田中 勉          第 3 回 水循環と農業生産の持続性 田中丸治哉          第 4 回 地域共生計画学 長野宇規          第 5 回 環境地盤工学 井上一哉          第 6 回 食品の熱および物質移動特性 豊田淨彦          第 7 回 生体計測工学 ツェンコヴァ ルミアナ          第 8 回 農業散布法とその機械及び問題点について 川村恒夫          第 9 回 画像処理による土壌破砕度計測 伊藤博通          第 10 回 雑草の物理的・耕種的防除法の原理と最近の研究動向 庄司浩一          第 11 回 家計と農業の連携可能性 草苺 仁          第 12 回 食料生産と農業経営の課題 高田 理          第 13 回 子どもの孤食とその要因 金子治平          第 14 回 食料流通と環境 小野雅之          第 15 回 途上国における農村開発 石田 章          第 16 回 予備日（試験期間中）</p>			
<b>成績評価と基準</b>			
<p>各教員の配分点は100/N点であり、平常点(授業中に実施する小テスト等)とレポート点を勘案して評価する。ここに、Nは講義をした教員の人数である。成績評価は、受講状態(50%)とレポート(50%)を目安とする。全教員の配分点の合計点が60点以上を合格とする。秀、優、良、可、不可の点数基準は研究科の評価基準に従う。</p>			
<b>履修上の注意（準備学習・復習、関連科目情報等を含む）</b>			
<p>生産環境工学コースおよび食料環境経済学コースの必修科目、他コースの選択科目である。  <b>【準備学習・復習】</b> 準備学習として、食料共生システム学専攻のホームページを予め参照のこと。復習として各回レポート問題を課す。  <b>【関連科目情報】</b> 食料・環境・健康生命(食料編)および(健康生命編)を併せて受講することががのぞましい。</p>			
<b>オフィスアワー・連絡先</b>			
<p>講義時間外に講義内容、問題等についての質問等を研究室で受け付ける。各講義においてEmailアドレス等連絡先を教示する。</p>			
<b>学生へのメッセージ</b>			
<p>コア科目講義なので、講義内容について自分なりに考えながら聞き、批判的精神で問題をとらえてほしい。講義中、疑問が生じた場合には積極的に質問し議論を深めてほしい。</p>			
<b>今年度の工夫</b>			
<p>環境問題に関する最新の話題についても論述する。</p>			
<b>教科書</b>			
<p>教科書は特に指定していない。プリントを講義中に適宜配布する。</p>			

農学研究科では、学生の多様なニーズや社会・海外協定校等からの要請に対応し、以下の取り組みを実施するとともに、多様な講義を開講している。

《資料9：学生の多様なニーズや社会・地域からの要請に対応した取組》

(1) 複数教員による指導体制
<p>本研究科では、前期課程・後期課程ともに、1人の学生を主指導教員1名・副指導教員1～2名で指導する複数指導体制をとり、さまざまな観点から複眼的にアドバイス・サポートを行っている。</p>
(2) 学位論文評価基準の策定と博士論文公開システムの導入
<p>博士課程前期課程では修士論文、博士課程後期課程では博士論文の提出を必須とし、厳格な審査のもとに学位を授与している。平成25年には、ディプロマ・ポリシーに沿って学位論文評価基準を定め、すべての博士論文の神戸大学学術成果リポジトリ (Kernel) での公開を開始した。</p> <p>(学位論文評価基準)</p> <p>神戸大学大学院農学研究科は、学位論文について、研究科のディプロマ・ポリシーに基づき、以下の基準により総合的に評価する。</p> <p>なお、この基準に定めるもののほか、専攻分野において必要なものは当該専攻が定める。</p> <p>(博士論文の評価基準)</p> <p>博士論文の審査にあたっては、以下の項目を評価基準として考慮する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学術的あるいは社会的な観点において、重要で新規な内容が含まれ、当該分野に貢献していること。</li> <li>2. 先行研究あるいは関連研究をふまえ、適切に課題が設定されていること。</li> <li>3. 章立てを含めて、論述が適切になされていること。</li> <li>4. 研究方法が適切に選択され、研究が実施されていること。</li> <li>5. 研究結果に関する考察が適切になされていること。</li> <li>6. 引用等が適切かつ必要十分であること。</li> </ol>
(3) 研究不正防止に関する取組
<p>平成26年度には全ての博士論文に対して、審査前及び最終提出前に論文チェックソフト (iThenticate、コピペルナー) による剽窃のチェックを義務付けた。また、平成27年度からは全大学院生にCITI Japanプロジェクトのeラーニング「責任ある研究行為：基盤編」の受講を義務付け、研究者としての倫理観の養成に努めている。</p>
(4) コア科目

「食料・環境・健康」に対応した農学の幅広い素養と学際性を身に付ける目的で、博士課程前期課程では、研究科内横断型のコア科目「食料・環境・健康生命（食料編）、（環境編）、（健康生命編）」を開講し、自専攻2単位を必修化している。また、平成26年度より、すべての講義を英語で行う「食料・環境・健康生命（英語編）」を開講し、留学生が英語で受講できる環境を整えるとともに、日本人学生の英語力涵養にも努めている。

#### (5) プレゼンテーション演習

博士課程前期課程では、研究成果をまとめる能力、発表能力、表現する能力を身に付けることを目的に「プレゼンテーション演習Ⅰ、Ⅱ」を開講し、必修化している。

#### (6) 学際的視点の涵養

神戸大学の自然科学系5研究科（理学、工学、農学、海事科学、システム情報学）に共通の授業科目「先端融合科学特論Ⅰ-1～5」（博士課程前期課程）、「先端融合科学特論Ⅱ-1～5」（博士課程後期課程）を選択科目とし、学際的視点の涵養を図っている。これらの授業には、外国人共同研究者による英語での講義を積極的に組み込んでいる。

#### (7) プログラムコースの設定

高度な専門職に必要な能力を身に付けることを目標に、博士課程前期課程では、他の自然科学系3研究科と連携したプログラムコース認定制度「ゲノム機能科学コース（理・農連携）」「バイオリファイナーコース（工・農連携）」「国際食料流通コース（農・海事連携）」を設けている《別添資料1：学生便覧 p.185～186》。

#### (8) 国際的に活躍できるリーダーとなる人材養成

平成25年度から、「UPLB アグロサイエンス実用英語演習」を開始した。このプログラムでは、フィリピン大学ロスバニョス校（UPLB）に3週間滞在し、実用英語の集中トレーニングを受けるとともに、UPLBの学生との交流、国際イネ研究所（IRRI）等各種農業関連研究所や農場の見学を行う。これらによりアグロサイエンスにおいて「武器」として使える英語能力を身に付ける。

さらに、平成26年度からは、UPLBから英語教育の専門家を招聘し、研究の出発点となる Research Proposal の書き方、その口頭発表（プレゼンテーション）の技術を学ぶ講義 Intermediate Techniques in English Speech Delivery（博士課程前期課程）を開始した。平成27年度にはこれを博士課程後期課程にも拡張し、advanced course として Comprehensive Techniques in English Speech Delivery を開講した。

（UPLB アグロサイエンス実用英語演習－IRRI 見学（左）・英語プレゼンテーション技術講義 Intermediate/Comprehensive Techniques in English Speech Delivery（右））



#### (9) 主体的な学修を促す取組

博士課程前期課程及び後期課程の修士論文・博士論文研究は、複数の指導教員の指導の下に研究の立案から論文作成に至るまで全て学生が主体となって行う。また、演習科目は学生による研究発表・論文紹介等から構成されており、学生の主体的な学修と発表からなる。

外国人講師による英語口頭発表技術を学ぶ講義は、講義開始前にかかなりの事前準備をさせる米国式の授業であり、受講学生に事前に「Research Proposal」の作成とパワーポイントの作成が課題として与えられる。学生は、アドバイザーとして指定された英語が堪能な数名の博士課程後期課程学生から、添削・アドバイスを繰り返し受ける。受講生は、このプロセスを通して、主体的に学ぶ姿勢を身に付ける。

#### (10) 学術交流協定校学生に対する授業の提供

平成 27 年度より自然科学系 5 部局が協力し、海外の学術交流協定校の学生に対する授業「One Week Experience in Kobe University」を開始した。このプログラムは各部局 1 日（午前講義・午後実習）を担当し、5 日間で神戸大学自然科学系学部の先端的な教育研究活動を紹介するものである。また、平成 27 年度には JST の「さくらサイエンスプラン」の支援を受けて、タマサート大学（タイ）と内蒙古農業大学（中国）からそれぞれ 10 名と 11 名の学生を受け入れて講義を行った。

#### (11) ティーチングアシスタント制度

本学では、「ティーチングアシスタント制度の実施に関するガイドライン」を制定しており、このガイドラインの選考基準に沿って、農学研究科の大学院生を教育補助者として採用している。毎月、学生及び監督教員から、ティーチングアシスタント実施報告

書を提出させることにより、成果の確認及び問題点の把握に努めている。この制度を通して、学生は教育を補助する、あるいは教育経験を積む機会を得ている。

(ティーチング・アシスタント制度の実施に関するガイドライン 抜粋)

ティーチング・アシスタント制度の実施に関するガイドライン  
月 27 日

平成 22 年 12

全学教務委員会制定

#### 1. 趣旨

このガイドラインは、「神戸大学ティーチング・アシスタント実施要領（平成 18 年 6 月 1 日制定）」に基づき、ティーチング・アシスタント（以下「TA」という。）及びTAに関する教員の業務、責任、権限を明確にし、TA制度を適切に運用することで、その目的を効果的なものとするため必要な事項を定める。

#### 2. TAの選考基準

TAの採用は、以下の点を考慮の上、TAとして適性を有する大学院生を指導教員又は授業担当教員（以下「担当教員」という。）による推薦に基づき、部局の教務委員会、教授会等で決定する。

- (1) 教育補助業務を担当するに十分な能力を有すること。
- (2) 当該学生の専門領域と担当する教育補助業務との適合性があること。
- (3) 当該学生の研究活動及び授業等に支障が生じないこと。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

農学研究科のアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーを策定し、求める人材像・育成する人材像を明確にするとともに、教育課程を見直した。これらに沿って、カリキュラムを農学全般に対する幅広い素養と学際性、並びに高度な専門性の涵養を両立させることができるよう工夫したほか、学位論文評価基準の策定と博士論文公開システム、研究不正防止に関する取り組みの導入を図った。また、国際教育においてはUPLBと協力して学生・講師を派遣・招聘し、質の高いプログラムを提供しており、高い教育効果を挙げている。

以上のことから、本研究科の教育内容・方法は期待される水準を上回ると判断する。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

## 観点 学業の成果

(観点に係る状況)

## (1) 学位授与

平成 22～26 年度に農学研究科博士課程前期課程に入学した者に対して修士の学位を授与した者の比率は平均で 95.5%であった《資料 10》。また、平成 22～27 年度の 6 年間における農学研究科博士課程後期課程の学位授与者数は 72 名であった《資料 11》。優秀な成績を修めた者に対しては早期修了制度を適用しており、前期課程では平成 22～27 年度の間早期修了者はいなかったが、後期課程では 11 名の早期修了者があった。

《資料 10：農学研究科の博士課程前期課程各専攻における学位（修士）の授与状況》

年度	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度	
	修了者	入学者	修了者	入学者	修了者	入学者	修了者	入学者	修了者	入学者	修了者	入学者
生産環境工学	20	23	21	21	19	20	19	20	17	17	17	19
食料環境経済学	7	10	5	6	4	4	9	10	9	9	10	7
応用動物学	22	25	22	23	24	24	22	23	25	27	25	23
応用植物学	20	23	25	27	22	24	25	26	15	17	16	20
応用生命化学	29	31	31	31	30	32	32	34	28	34	30	32
農環境生物学	28	28	22	23	23	23	26	27	24	26	26	24
合計	126	140	126	131	122	127	133	140	118	130	124	125
学位授与率(%)	90		96		96		95		91		99	

《資料 11：農学研究科の博士課程後期課程における学位(博士)の授与状況と早期修了者数》

年度	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度	
	修了者	入学者	修了者	入学者	修了者	入学者	修了者	入学者	修了者	入学者	修了者	入学者
生産環境工学	1	1	1	1	1	2	3	5	2	1	3	4
食料環境経済学	3	3	0	0	0	2	0	0	0	2	0	2
応用動物学	4	4	2	2	1	3	1	3	1	4	3	5
応用植物学	2	2	1	3	1	3	3	4	1	1	2	2
応用生命化学	2	3	3	8	1	5	1	3	2	3	2	4
農環境生物学	10	14	4	7	1	4	4	10	4	4	2	8
合計	22	27	11	21	5	19	12	25	10	15	12	25
早期修了者数	0		2		2		2		2		3	

## (2) 著書、論文、学会発表と受賞

## 神戸大学農学研究科 分析項目Ⅱ

博士課程前期課程及び後期課程学生の学会等におけるポスター・口頭発表数及び研究論文の出版数を《資料 12》に示す。国内外における著書、論文、学会での発表総数は年 433～554 件と高水準を維持しており、学生の研究成果は高いレベルにある。また、その内 1 割以上が海外での学会における発表となっている。

《資料 12: 著書、論文、学会での発表状況》

		(単位：報，人)					
		平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
論文・著書	論文(査読付き)	124	152	128	104	105	139
	著書	4	6	0	3	1	1
	その他(総説・解説など)	1	10	3	0	4	4
研究発表等	招待講演	3	2	0	2	1	3
(国内)	一般講演	279	320	270	260	307	257
研究発表等	招待講演	1	2	2	3	1	3
(海外)	一般講演	52	62	50	61	47	50
総計		464	554	453	433	466	457

博士課程前期課程及び後期課程学生の学会賞及び論文賞等の受賞については、第二期中期目標期間中増加傾向にあり、近年では 20 件前後の受賞となっている《資料 13》。主な受賞は学会等での発表に対するものであるが、原著論文に対する受賞も見られ、研究は高く評価されている《資料 14》。

《資料 13：農学研究科博士課程前期・後期課程学生による受賞状況》

平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
13人	9人	17人	22人	20人	22人

《資料 14：農学研究科博士課程前期・後期課程学生による受賞の内容（一部抜粋）》

日付	学会名・財団名	受賞者の所属	賞名
平成 23 年 7 月 15 日	日本食品保蔵学会	資源生命科学専攻	論文賞
平成 23 年 9 月 22 日	日本カテキン学会	生命機能科学専攻	優秀プレゼンテーション賞
平成 24 年 3 月 27 日	第 56 回日本応用動物昆虫学会大会	生命機能科学専攻	ポスター賞
平成 24 年 10 月 19 日	第 105 回日本繁殖生物学会大会	資源生命科学専攻	優秀発表賞
平成 25 年 12 月 13 日	IVth International Conference on Polyphenols and Health	生命機能科学専攻	Young Investigator Award
平成 25 年 12 月 13 日	日本農芸化学会関西支部 第 482 回講演会	生命機能科学専攻	若手優秀発表賞



神戸大学農学研究科 分析項目Ⅱ

平成 26 年 6 月 20 日	日本育種学会	資源生命科学専攻	ポスター賞
平成 26 年 11 月 14 日	第 49 回地盤工学研究発表会	食料共生システム学専攻	優秀論文発表者賞
平成 26 年 12 月 12 日	雨水資源化システム学会第 22 回 研究発表会	食料共生システム学専攻	優秀発表賞
平成 26 年 11 月 24 日	International Conference of Asian Environmental Chemistry (アジア環境化学国際会議) 2014	生命機能科学専攻	Outstanding Student Research Award
平成 27 年 2 月 9 日	農業農村工学会 京都支部会	食料共生システム学専攻	研究奨励賞
平成 27 年 2 月 9 日	神戸大学研究基盤センター若手 フロンティア研究会 2014	資源生命科学専攻	優秀賞

(3) 海外渡航

平成 22～27 年度の学生の海外渡航は総計 138 件あった《資料 15》。渡航先は、アジア地域だけではなく、北米、ヨーロッパを含めた多様な地域にまたがっており、世界的な規模での広がりを見せている。用務内容も教員の業務補佐に留まらず、英語での研究発表等も見られる。《資料 16》。

《資料 15: 大学院生の学会・調査等による海外渡航数》

年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	総計
件数	25	21	19	22	23	28	138

《資料 16: 大学院生の学会・調査等による海外渡航内容(平成 27 年度分から、一部抜粋)》

用務先(相手国)	用 務
スコットランド (イギリス)	調査補助
山東省 (中国)	調査補助
ナポリ (イタリア)	国際会議 発表補助
河南省 (中国)	調査補助
ロンドン (イギリス)	実験補助
チベット高原 (中国)	調査補助
サハ州 (マレーシア)	調査補助
ロスバニョス (フィリピン)	実用英語演習研修引率
ヤンゴン (ミャンマー)	調査補助
ヤンゴン (ミャンマー)	調査補助
UCSD (カナダ)	シンポジウム発表補助
ホノルル (アメリカ)	国際会議参加及び情報収集補助
ホノルル (アメリカ)	国際会議参加及び情報収集補助
トラート (タイ)	調査および研究打ち合わせ補助
ホーチミン (ベトナム)	調査補助
メルボルン (オーストラリア)	国際会議参加・発表及び情報収集補助
北京 (中国)	共同研究補助

(4) 修了生アンケート

農学研究科博士課程前期課程の修了生に対するアンケート調査結果を《資料17》に示す。「深い学識」及び「高度な専門知識」に対して、どの程度身についたと思いますかという問いに対し、半数以上の学生が身についたと回答しており、学習効果に対する学生の満足度は一定の水準を超えている。総合的な物の見方に対しては100%の学生が身についたと答えており、その主たる要因に修了研究をあげている。アンケート結果からは、農学研究科博士課程前期課程における修了研究の満足度は高く、その主な理由は指導教員からの直接的な指導によると分析される。

《資料17：農学研究科博士課程前期課程の修了生に対するアンケート調査結果（平成26年度実施、一部抜粋）》

設問番号	回答	%
1:「深い学識」について、あなたは、2年間の博士前期課程において、どの程度身についたと思いますか。また、どのような場面が修得にもっとも役に立ったと思いますか。	《程度》大いに身についた	31%
	《程度》どちらかといえば身についた	54%
	《程度》どちらともいえない	8%
	《程度》どちらかといえば身につかなかった	8%
	《程度》全く身につかなかった	0%
	《場面》各研究科で専門教育の講義・演習・実験を受けたこと	8%
	《場面》修了(学位)研究を行ったこと	17%
	《場面》ゼミ・研究室に所属し指導教員から直接指導を受けたこと	25%
	《場面》先輩から教育・研究の指導を受けたこと	0%
	《場面》TA(ティーチングアシスタント)・RA(リサーチアシスタント)を行ったこと	0%
	《場面》プロジェクト研究、共同研究を行ったこと	0%
	《場面》学生同士の勉強会・研究会に参加したこと	0%
	《場面》学会や学外の研究会等に参加したこと	33%
	《場面》社会活動(ボランティア等)に参加したこと	8%
	《場面》その他	8%
2:「高度の専門知識」について、あなたは、2年間の博士前期課程において、どの程度身についたと思いますか。また、どのような場面が修得にもっとも役に立ったと思いますか。	《程度》大いに身についた	31%
	《程度》どちらかといえば身についた	54%
	《程度》どちらともいえない	15%
	《程度》どちらかといえば身につかなかった	0%
	《程度》全く身につかなかった	0%
	《場面》各研究科で専門教育の講義・演習・実験を受けたこと	0%
	《場面》修了(学位)研究を行ったこと	33%
	《場面》ゼミ・研究室に所属し指導教員から直接指導を受けたこと	50%
	《場面》先輩から教育・研究の指導を受けたこと	0%
	《場面》TA(ティーチングアシスタント)・RA(リサーチアシスタント)を行ったこと	0%
	《場面》プロジェクト研究、共同研究を行ったこと	0%
	《場面》学生同士の勉強会・研究会に参加したこと	0%
	《場面》学会や学外の研究会等に参加したこと	8%
	《場面》社会活動(ボランティア等)に参加したこと	0%
	《場面》その他	8%
5:「総合的なものの見方」について、あなたは、2年間の博士前期課程において、どの程度身についたと思いますか。また、どのような場面が修得にもっとも役に立ったと思いますか。	《程度》大いに身についた	23%
	《程度》どちらかといえば身についた	77%
	《程度》どちらともいえない	0%
	《程度》どちらかといえば身につかなかった	0%
	《程度》全く身につかなかった	0%
	《場面》各研究科で専門教育の講義・演習・実験を受けたこと	0%
	《場面》修了(学位)研究を行ったこと	67%
	《場面》ゼミ・研究室に所属し指導教員から直接指導を受けたこと	25%
	《場面》先輩から教育・研究の指導を受けたこと	8%
	《場面》TA(ティーチングアシスタント)・RA(リサーチアシスタント)を行ったこと	0%
	《場面》プロジェクト研究、共同研究を行ったこと	0%
	《場面》学生同士の勉強会・研究会に参加したこと	0%
	《場面》学会や学外の研究会等に参加したこと	0%
	《場面》社会活動(ボランティア等)に参加したこと	0%
	《場面》その他	0%

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

在学生の修了状況や、学位論文に関わる研究成果の学会等での多くの発表と公表論文、関連学会からの多くの受賞等、さらに修了生からの在学中に受けた教育に対する高い評価から判断して、農学研究科の教育目的に照らし、十分な教育の成果が上がっていると言える。よって、学業の成果は期待される水準を上回ると判断する。

### 観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

平成 22～27 年度において、農学研究科博士課程前期課程における進学率と就職率の合計は 93.7%であった《資料 18》。民間企業を中心に、官公庁や大学・研究機関等へと就職している。具体的には、製造業へ就職する者が最も多く、全体の約半数を占めていた《資料 19》。次いで多かったのが博士課程後期課程への進学者で、全 67 名の進学者中、63 名が本学の博士課程後期課程へと進学しており、本学への進学率が 92.5%と極めて高い値を示した《資料 18》。

また、後期課程では半数以上が研究・技術職や大学等の教育機関および研究機関に就職しており、この傾向はここ数年安定している《資料 20》。

神戸大学農学研究科 分析項目Ⅱ

《資料 18：農学研究科博士課程前期課程における修了者の進路状況》

年度	講座	修了者数	進学者数		計	進学者率	就職者数				就職率	その他（未定等）	
			自大学	他大学			大学・研究機関	官公庁	民間企業	計		計	割合
22	生産環境工学	20	0	0	0	0.0%	0	5	14	19	95.0%	1	5.0%
	食料環境経済学	2	0	0	0	0.0%	0	0	1	1	50.0%	1	50.0%
	応用動物学	28	2	1	3	10.7%	2	0	21	23	82.1%	2	7.1%
	応用植物学	25	1	0	1	4.0%	0	3	21	24	96.0%	0	0.0%
	応用生命化学	35	5	0	5	14.3%	1	2	26	29	82.9%	1	2.9%
	農環境生物学	28	5	0	5	17.9%	0	0	23	23	82.1%	0	0.0%
計	138	13	1	14	10.1%	3	10	106	119	86.2%	5	3.6%	
23	生産環境工学	23	1	0	1	4.3%	0	7	13	20	87.0%	2	8.7%
	食料環境経済学	6	2	0	2	33.3%	0	0	3	3	50.0%	1	16.7%
	応用動物学	23	2	1	3	13.0%	0	0	18	18	78.3%	2	8.7%
	応用植物学	17	2	0	2	11.8%	0	2	11	13	76.5%	2	11.8%
	応用生命化学	29	2	0	2	6.9%	1	1	21	23	79.3%	4	13.8%
	農環境生物学	27	2	0	2	7.4%	0	2	20	22	81.5%	3	11.1%
計	125	11	1	12	9.6%	1	12	86	99	79.2%	14	11.2%	
24	生産環境工学	21	2	0	2	9.5%	0	4	14	18	85.7%	1	4.8%
	食料環境経済学	4	0	0	0	0.0%	1	0	2	3	75.0%	1	25.0%
	応用動物学	19	2	0	2	10.5%	1	0	13	14	73.7%	3	15.8%
	応用植物学	25	4	0	4	16.0%	0	3	18	21	84.0%	0	0.0%
	応用生命化学	26	2	0	2	7.7%	1	1	22	24	92.3%	0	0.0%
	農環境生物学	28	3	0	3	10.7%	1	4	17	22	78.6%	3	10.7%
計	123	13	0	13	10.6%	4	12	86	102	82.9%	8	6.5%	
25	生産環境工学	20	0	0	0	0.0%	0	4	15	19	95.0%	1	5.0%
	食料環境経済学	1	0	0	0	0.0%	0	0	1	1	100.0%	0	0.0%
	応用動物学	25	3	0	3	12.0%	0	0	20	20	80.0%	2	8.0%
	応用植物学	22	1	0	1	4.5%	0	2	17	19	86.4%	2	9.1%
	応用生命化学	30	1	0	1	3.3%	1	1	24	26	86.7%	3	10.0%
	農環境生物学	22	1	0	1	4.5%	0	2	19	21	95.5%	0	0.0%
計	120	6	0	6	5.0%	1	9	96	106	88.3%	8	6.7%	
26	生産環境工学	19	1	0	1	5.3%	0	7	11	18	94.7%	0	0.0%
	食料環境経済学	10	1	0	1	10.0%	0	3	3	6	60.0%	3	30.0%
	応用動物学	21	3	0	3	14.3%	0	0	18	18	85.7%	0	0.0%
	応用植物学	22	2	0	2	9.1%	0	2	17	19	86.4%	1	4.5%
	応用生命化学	28	2	0	2	7.1%	0	1	23	24	85.7%	2	7.1%
	農環境生物学	30	6	0	6	20.0%	3	1	20	24	80.0%	0	0.0%
計	130	15	0	15	11.5%	3	14	92	109	83.8%	6	4.6%	
27	生産環境工学	17	0	0	0	0.0%	0	3	14	17	100.0%	0	0.0%
	食料環境経済学	10	1	1	2	20.0%	0	2	4	6	60.0%	2	20.0%
	応用動物学	25	0	1	1	4.0%	0	1	23	24	96.0%	0	0.0%
	応用植物学	16	0	0	0	0.0%	1	0	13	14	87.5%	2	12.5%
	応用生命化学	31	1	0	1	3.2%	1	0	27	28	90.3%	2	6.5%
	農環境生物学	25	3	0	3	12.0%	0	3	18	21	84.0%	1	4.0%
計	124	5	2	7	5.6%	2	9	99	110	88.7%	7	5.6%	
全合計		760	63	4	67	8.8%	14	66	565	645	84.9%	48	6.3%

《資料 19：農学研究科博士課程前期課程修了生の就職状況》

業種	博士前期課程（修士）修了後の進路（平成22年度～平成27年度）						（単位：人）	
	食料共生システム学専攻		資源生命科学専攻		生命機能科学専攻		合計	（%）
	生産環境工学	食料環境経済学	応用動物学	応用植物学	応用生命化学	農環境生物学		
農業	0	0	2	2	0	2	6	0.8
建設業	4	0	0	1	1	0	6	0.8
製造業	52	5	70	64	115	79	385	51.1
電気・ガス	1	0	0	2	1	0	4	0.5
情報通信	6	1	10	10	4	11	42	5.6
運輸	2	0	2	0	0	0	4	0.5
卸売・小売	2	5	4	5	2	5	23	3.1
金融・保険	5	1	2	3	0	2	13	1.7
不動産業	0	1	1	1	0	0	3	0.4
医療・教育	1	1	8	2	5	5	22	2.9
サービス	7	1	13	8	18	14	61	8.1
公務員	30	5	1	12	5	12	65	8.6
その他	6	8	9	7	14	9	53	7.0
大学院進学	4	5	15	10	13	20	67	8.9
合計	120	33	137	127	178	159	754	

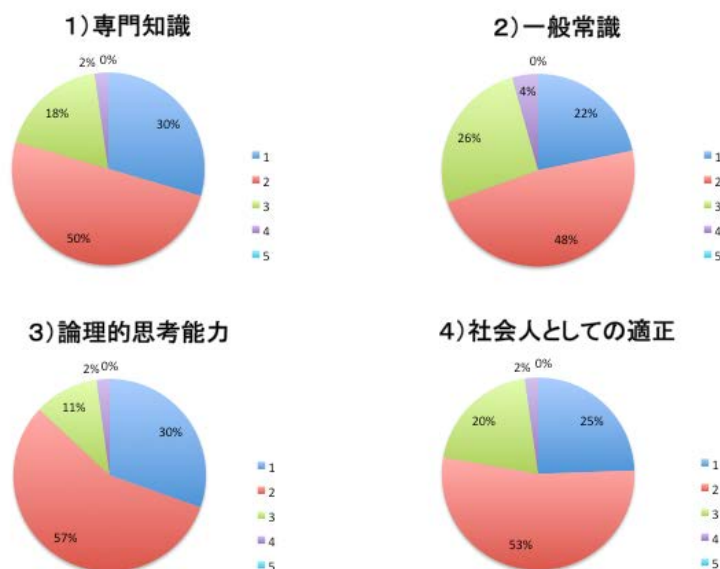
《資料 20：農学研究科博士課程後期課程修了生の就職状況》

年度	修了者数	研究・技術関係	大学	特別研究員(ポスドク)	研究支援推進員	高等専門学校	中等教育	公務員	管理的職務	その他
平成22年度	11	4		2				1		4
平成23年度	12	4		1		1			1	5
平成24年度	23	10	3	1	1		1	1	1	5
平成25年度	17	5	2							10
平成26年度	11	2	2	1		1				5
平成27年度	19	10	1	2	1			2		3
合計	93	35	8	7	2	2	1	4	2	32
計 55人(59.1%)							計 38人(40.9%)			

平成 24 年 6 月から 7 月に、卒業または修了した者の就職先を対象として、「神戸大学農学部・農学研究科の教育改善を目的とした就職先アンケート調査」を実施した。アンケート調査は、農学研究科教務学生係から就職先の担当者に向けてアンケートを郵送し、回収する方法で実施した。就職先から合計 46 件（企業：22 件、官公庁：20 件、その他：4 件）の回答が寄せられた《資料 21》。）就職先からは、専門知識について「高く評価できる」が 30%、「どちらかというと高く評価できる」が 50%であり、80%が高く評価しており、「明らかに評価できない」との回答はなかった。また、論理的思考能力では、87%から「高く評価できる」または「どちらかというと高く評価できる」という回答を得た。

以上のように、卒業生及び修了生と、その就職先からのアンケート調査の結果から判断して、神戸大学農学部・農学研究科での学習成果が上がっていると判断できる。

《資料 21：就職先へのアンケート調査結果》



1：高く評価できる 2：どちらかというと高く評価できる 3：普通  
4：どちらかというと評価できない 5：明らかに評価できない

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

農学研究科における学位取得者の高い就職率、特に研究・技術職や大学等の教育機関および研究機関への高い就職率は、修了生が社会から高い評価を受けていることの表れであり、教育目的に沿った成果が上がっていると考えられる。また、企業就職先に対するアンケート調査では、修得した専門知識、一般常識、論理的思考能力を評価できるとの回答を多数得ており、在学中に修得すべき学力・能力・資質は大学院の教育で十分に身に付いていると考えられ、本研究科の教育目的・人材育成の目標に沿った教育の成果が上がっていることが示された。

以上のことから、進路・就職の状況は期待される水準を上回ると判断する。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

##### 事例① 教育・指導体制の整備

平成 19 年度に農学研究科のアドミッション・ポリシー、平成 23 年度にディプロマ・ポリシー、平成 24 年度にカリキュラム・ポリシーを策定し、体系的な教育課程を構築した。平成 25 年度には、ディプロマ・ポリシーに沿って学位論文評価基準を定め、すべての博士論文の神戸大学学術成果リポジトリでの公開を開始した。これらにより、入学から修了までの各ステップで必要とされる基準が明確に定められた。

一方、前期課程・後期課程ともに、1 人の学生を複数の指導教員で指導する複数指導体制をとり、さまざまな観点から複眼的にアドバイス・サポートを行っている。修了生の多くは「深い学識」「高度な専門知識」「総合的な物の見方」を修了研究や指導教員からの直接的な指導によって身に付けたとしており《資料 16》、複数教員による指導体制が教育の質の向上につながっていると見える。

さらに、平成 22 年度から 27 年度にかけて、1,250 人の博士課程前期課程生および 168 名の博士過程後期課程生を TA に採用した。本制度を利用した学生は、全学生の 60% 以上にあたる。TA に採用された学生に対しては、業務内容の確認、雇用期間終了後の実施報告書の提出を求めるなど、TA 制度を利用して社会人としてのルールや実社会のしくみ、勤労に対する積極的な取り組み方を指導することにも努めており、この経験が修了生に対する企業からの評価の向上に寄与していると言える《資料 21》。

以上のような体制によるきめ細かな教育が、博士課程前期課程の高い学位授与率と就職率、博士課程後期課程の研究・技術職や大学等の教育機関および研究機関への高い就職率に繋がっていると考えられる。

##### 事例② FD 活動の推進

FD 活動の一環として実施しているアンケートの結果から、学生が国際教育の充実を強く望んでいることが明らかとなった。そこで、この要望に応えるべく、新たに「UPLB アグロサイエンス実用英語演習」を開講した。その結果、修了後には学生の意識が (a) 学問的 Discussion を英語で抵抗なくできるようになった (b) 欧米スタイルのアクティブラーニング講義に参加する態度が身についた (c) 学部生とともにこれらのアクティビティを行う中で、後輩を指導・リードするリーダーシップを身につけることができた 等明らかに変化し、学生の満足度が高まっている。

これら教育の国際化を基礎として、平成 26 年度にはベトナム農業アカデミーと、平成 27 年度には UPLB と学生交流協定を締結した。また、平成 30 年度を目処に、博士課程前期課程及び後期課程に大学院英語コースを設置し、教育の国際化をさらに進める予定である。

## (2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

### 事例① 研究発表会の開催とプレゼンテーション技術の向上へ向けた取組

農学研究科では、修士論文、博士論文修士論文の完成度をより向上させる目的で、修士論文、博士論文の研究経過発表会及び研究成果発表会を学年ごとに開催している。研究経過発表会及び研究成果発表会では、教員から積極的なアドバイスが行われ、学生が執筆する修士論文や博士論文の内容へと反映される。

《参考 URL : 「神戸大学教務情報システム」 <https://kym.kobe-u.ac.jp/kobe-u/campus>》

《参考 URL : 農学研究科ホームページ「大学院博士課程学位論文」

<http://www.ans.kobe-u.ac.jp/zaigakusei/gakuihomepage08/gakuironbuntop1.html>》

また、博士課程前期課程では、研究成果をまとめる能力、発表能力、表現する能力を身に付けることを目的に「プレゼンテーション演習Ⅰ、Ⅱ」を開講し、必修化している。さらに、英語でプレゼンテーションを行う技術を向上させるため、UPLB から英語教育の専門家を招聘し、Intermediate Techniques in English Speech Delivery (博士課程前期課程)、Comprehensive Techniques in English Speech Delivery (博士課程後期課程)を開講した。これらの講義では、プレゼンテーションの技術に関する解説を受けた後、実際にパワーポイントを使って発表し、改善点を指摘してもらいながら修正していく。日本では、プレゼンテーションのノウハウを「技術」として体系的に学ぶ機会はほとんどないので、これらは、学生にとって非常にインパクトの強い講義となった。最終日の発表では受講生のほとんどが堂々と質の高いプレゼンテーションを行えるようになった。また、欧米式アクティブラーニングを体験し、それに参加する姿勢・態度を身に付けることができた《別添資料 2 : 平成 26 年度受講生感想文》。

これらの取組が、学生による学会での数多くの発表《資料 12》や学会での発表賞や論文賞等の受賞数の増加《資料 13、14》につながっている。

### 事例② 就職支援

農学研究科への求人について一覧を作成し、農学研究科ホームページ上で公開している。平成 27 年度には、100 件を超える就職情報を本ホームページ上に掲載しており、タイムリーな情報発信サイトとして学生に活用されている。また、農学研究科内に「キャリア支援室」を設け、就職関係の資料、就職説明会の案内、求人票等が常時閲覧できる体制を整えた。さらに、各コースに就職担当委員を置き、学生の就職支援を開始した。特に、OB・OG と就職担当委員が連携を取り、企業から人事担当者や研究所の研究員が参加して学生を対象にセミナーを行っている。これらの取組により、平成 26 年度では進学者を除く博士課程前期課程生の 95%が就職した。また、博士課程後期課程では 100%の学生が就職している。よって、農学研究科の就職支援活動は学生の高い就職率の維持につながっている。《資料 18~20》

《参考 URL : 就職情報、企業、公務員等求人一覧表

<http://www.ans.kobe-u.ac.jp/zaigakusei/syusyoku/index.html>》



正誤表 学部・研究科等の現況調査表（教育）

神戸大学農学研究科

	頁数・行数等	誤	正																																																																								
1	24-15 頁・5~9 行 目	平成 22~26 年度に農学研究科博士課程前期課程に入学した者に対して修士の学位を授与した者の比率は平均で 95.5%であった《資料 10》。また、平成 22~27 年度の 6 年間における農学研究科博士課程後期課程の学位授与者数は 72 名であった《資料 11》。優秀な成績を修めた者に対しては早期修了制度を適用しており、前期課程では平成 22~27 年度の間早期修了者はいなかったが、後期課程では 11 名の早期修了者があった。	平成 22~26 年度に農学研究科博士課程前期課程に入学した者に対して修士の学位を授与した者の比率は平均で 95.5%であった《資料 10》。また、平成 22~26 年度の 5 年間における農学研究科博士課程後期課程の学位授与者数は 42 名であった《資料 11》。優秀な成績を修めた者に対しては早期修了制度を適用しており、前期課程では平成 22~26 年度の間早期修了者はいなかったが、後期課程では 7 名の早期修了者があった。																																																																								
2	24-15 頁・資料 10	<p>《資料 10：前期課程》 「<u>修了者</u>」</p> <p>-----</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>講座名</th> <th>年度</th> <th>修了者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>生産環境工学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>17</u></td> </tr> <tr> <td>食料環境経済学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>10</u></td> </tr> <tr> <td>応用動物学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>25</u></td> </tr> <tr> <td>応用植物学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>16</u></td> </tr> <tr> <td>応用生命化学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>30</u></td> </tr> <tr> <td>農環境生物学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>26</u></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>124</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>-----</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>講座名</th> <th>年度</th> <th>入学者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>生産環境工学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>19</u></td> </tr> <tr> <td>食料環境経済学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>7</u></td> </tr> <tr> <td>応用動物学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>23</u></td> </tr> </tbody> </table>	講座名	年度	修了者	生産環境工学	平成 27 年度	<u>17</u>	食料環境経済学	平成 27 年度	<u>10</u>	応用動物学	平成 27 年度	<u>25</u>	応用植物学	平成 27 年度	<u>16</u>	応用生命化学	平成 27 年度	<u>30</u>	農環境生物学	平成 27 年度	<u>26</u>	合計	平成 27 年度	<u>124</u>	講座名	年度	入学者	生産環境工学	平成 27 年度	<u>19</u>	食料環境経済学	平成 27 年度	<u>7</u>	応用動物学	平成 27 年度	<u>23</u>	<p>《資料 10：前期課程》 「<u>修了者（学位授与）※</u>」 (資料項目名の訂正)</p> <p>-----</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>講座名</th> <th>年度</th> <th>修了者 (学位授与)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>生産環境工学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>食料環境経済学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>応用動物学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>応用植物学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>応用生命化学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>農環境生物学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>-----</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>講座名</th> <th>年度</th> <th>入学者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>生産環境工学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>20</u></td> </tr> <tr> <td>食料環境経済学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>8</u></td> </tr> <tr> <td>応用動物学</td> <td>平成 27 年度</td> <td><u>22</u></td> </tr> </tbody> </table>	講座名	年度	修了者 (学位授与)	生産環境工学	平成 27 年度	<u>二</u>	食料環境経済学	平成 27 年度	<u>二</u>	応用動物学	平成 27 年度	<u>二</u>	応用植物学	平成 27 年度	<u>二</u>	応用生命化学	平成 27 年度	<u>二</u>	農環境生物学	平成 27 年度	<u>二</u>	合計	平成 27 年度	<u>二</u>	講座名	年度	入学者	生産環境工学	平成 27 年度	<u>20</u>	食料環境経済学	平成 27 年度	<u>8</u>	応用動物学	平成 27 年度	<u>22</u>
講座名	年度	修了者																																																																									
生産環境工学	平成 27 年度	<u>17</u>																																																																									
食料環境経済学	平成 27 年度	<u>10</u>																																																																									
応用動物学	平成 27 年度	<u>25</u>																																																																									
応用植物学	平成 27 年度	<u>16</u>																																																																									
応用生命化学	平成 27 年度	<u>30</u>																																																																									
農環境生物学	平成 27 年度	<u>26</u>																																																																									
合計	平成 27 年度	<u>124</u>																																																																									
講座名	年度	入学者																																																																									
生産環境工学	平成 27 年度	<u>19</u>																																																																									
食料環境経済学	平成 27 年度	<u>7</u>																																																																									
応用動物学	平成 27 年度	<u>23</u>																																																																									
講座名	年度	修了者 (学位授与)																																																																									
生産環境工学	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																									
食料環境経済学	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																									
応用動物学	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																									
応用植物学	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																									
応用生命化学	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																									
農環境生物学	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																									
合計	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																									
講座名	年度	入学者																																																																									
生産環境工学	平成 27 年度	<u>20</u>																																																																									
食料環境経済学	平成 27 年度	<u>8</u>																																																																									
応用動物学	平成 27 年度	<u>22</u>																																																																									

	頁数・行数等	誤	正																																																																																																		
		応用生命化学 平成 27 年度 <u>32</u> 農環境生物学 平成 27 年度 <u>24</u> 合計 平成 27 年度 <u>125</u> ----- <b>学位授与率 (%)</b> 平成 27 年度 <u>99</u> -----	応用生命化学 平成 27 年度 <u>37</u> 農環境生物学 平成 27 年度 <u>23</u> 合計 平成 27 年度 <u>130</u> ----- <b>学位授与率 (%)</b> 平成 27 年度 <u>二</u> ----- ※当該年度入学者のうち平成 27 年度末までに学位を取得し、修了した人数を示す。 (資料下部に注釈の追加)																																																																																																		
3	24-15 頁・資料 11	《資料 11：後期課程》 「 <u>修了者</u> 」 ----- <table border="1"> <thead> <tr> <th>講座名</th> <th>年度</th> <th>修了者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">生産環境工学</td> <td>平成 26 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>3</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">食料環境経済学</td> <td>平成 26 年度</td> <td><u>0</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>0</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">応用動物学</td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>3</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="4">応用植物学</td> <td>平成 22 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 25 年度</td> <td><u>3</u></td> </tr> <tr> <td>平成 26 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="4">応用生命化学</td> <td>平成 22 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 24 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 26 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="3">農環境生物学</td> <td>平成 25 年度</td> <td><u>4</u></td> </tr> <tr> <td>平成 26 年度</td> <td><u>4</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>平成 22 年度</td> <td><u>22</u></td> </tr> <tr> <td></td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>5</u></td> </tr> </tbody> </table>	講座名	年度	修了者	生産環境工学	平成 26 年度	<u>2</u>	平成 27 年度	<u>3</u>	食料環境経済学	平成 26 年度	<u>0</u>	平成 27 年度	<u>0</u>	応用動物学	平成 24 年度	<u>1</u>	平成 27 年度	<u>3</u>	応用植物学	平成 22 年度	<u>2</u>	平成 25 年度	<u>3</u>	平成 26 年度	<u>1</u>	平成 27 年度	<u>2</u>	応用生命化学	平成 22 年度	<u>2</u>	平成 24 年度	<u>1</u>	平成 26 年度	<u>2</u>	平成 27 年度	<u>2</u>	農環境生物学	平成 25 年度	<u>4</u>	平成 26 年度	<u>4</u>	平成 27 年度	<u>2</u>	合計	平成 22 年度	<u>22</u>		平成 24 年度	<u>5</u>	《資料 11：後期課程》 「 <u>修了者 (学位授与) ※</u> 」 (資料項目名の訂正) ----- <table border="1"> <thead> <tr> <th>講座名</th> <th>年度</th> <th>修了者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">生産環境工学</td> <td>平成 26 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">食料環境経済学</td> <td>平成 26 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">応用動物学</td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="4">応用植物学</td> <td>平成 22 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 25 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 26 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="4">応用生命化学</td> <td>平成 22 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 24 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 26 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td rowspan="3">農環境生物学</td> <td>平成 25 年度</td> <td><u>3</u></td> </tr> <tr> <td>平成 26 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>二</u></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>平成 22 年度</td> <td><u>20</u></td> </tr> <tr> <td></td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>7</u></td> </tr> </tbody> </table>	講座名	年度	修了者	生産環境工学	平成 26 年度	<u>二</u>	平成 27 年度	<u>二</u>	食料環境経済学	平成 26 年度	<u>二</u>	平成 27 年度	<u>二</u>	応用動物学	平成 24 年度	<u>2</u>	平成 27 年度	<u>二</u>	応用植物学	平成 22 年度	<u>1</u>	平成 25 年度	<u>1</u>	平成 26 年度	<u>二</u>	平成 27 年度	<u>二</u>	応用生命化学	平成 22 年度	<u>1</u>	平成 24 年度	<u>2</u>	平成 26 年度	<u>二</u>	平成 27 年度	<u>二</u>	農環境生物学	平成 25 年度	<u>3</u>	平成 26 年度	<u>1</u>	平成 27 年度	<u>二</u>	合計	平成 22 年度	<u>20</u>		平成 24 年度	<u>7</u>
講座名	年度	修了者																																																																																																			
生産環境工学	平成 26 年度	<u>2</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>3</u>																																																																																																			
食料環境経済学	平成 26 年度	<u>0</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>0</u>																																																																																																			
応用動物学	平成 24 年度	<u>1</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>3</u>																																																																																																			
応用植物学	平成 22 年度	<u>2</u>																																																																																																			
	平成 25 年度	<u>3</u>																																																																																																			
	平成 26 年度	<u>1</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>2</u>																																																																																																			
応用生命化学	平成 22 年度	<u>2</u>																																																																																																			
	平成 24 年度	<u>1</u>																																																																																																			
	平成 26 年度	<u>2</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>2</u>																																																																																																			
農環境生物学	平成 25 年度	<u>4</u>																																																																																																			
	平成 26 年度	<u>4</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>2</u>																																																																																																			
合計	平成 22 年度	<u>22</u>																																																																																																			
	平成 24 年度	<u>5</u>																																																																																																			
講座名	年度	修了者																																																																																																			
生産環境工学	平成 26 年度	<u>二</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																																																			
食料環境経済学	平成 26 年度	<u>二</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																																																			
応用動物学	平成 24 年度	<u>2</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																																																			
応用植物学	平成 22 年度	<u>1</u>																																																																																																			
	平成 25 年度	<u>1</u>																																																																																																			
	平成 26 年度	<u>二</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																																																			
応用生命化学	平成 22 年度	<u>1</u>																																																																																																			
	平成 24 年度	<u>2</u>																																																																																																			
	平成 26 年度	<u>二</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																																																			
農環境生物学	平成 25 年度	<u>3</u>																																																																																																			
	平成 26 年度	<u>1</u>																																																																																																			
	平成 27 年度	<u>二</u>																																																																																																			
合計	平成 22 年度	<u>20</u>																																																																																																			
	平成 24 年度	<u>7</u>																																																																																																			

	頁数・行数等	誤	正																																																										
		<p>平成 25 年度 <u>12</u></p> <p>平成 26 年度 <u>10</u></p> <p>平成 27 年度 <u>12</u></p> <p>-----</p> <table> <thead> <tr> <th>講座名</th> <th>年度</th> <th>入学者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>食料環境経済学</td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>応用生命化学</td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>5</u></td> </tr> <tr> <td>農環境生物学</td> <td>平成 23 年度</td> <td><u>7</u></td> </tr> <tr> <td></td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>4</u></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>平成 23 年度</td> <td><u>21</u></td> </tr> <tr> <td></td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>19</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>-----</p> <p><b>早期修了者数</b></p> <table> <tbody> <tr> <td>平成 23 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 24 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 25 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>3</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>-----</p>	講座名	年度	入学者	食料環境経済学	平成 24 年度	<u>2</u>	応用生命化学	平成 24 年度	<u>5</u>	農環境生物学	平成 23 年度	<u>7</u>		平成 24 年度	<u>4</u>	合計	平成 23 年度	<u>21</u>		平成 24 年度	<u>19</u>	平成 23 年度	<u>2</u>	平成 24 年度	<u>2</u>	平成 25 年度	<u>2</u>	平成 27 年度	<u>3</u>	<p>平成 25 年度 <u>9</u></p> <p>平成 26 年度 <u>2</u></p> <p>平成 27 年度 <u>2</u></p> <p>-----</p> <table> <thead> <tr> <th>講座名</th> <th>年度</th> <th>入学者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>食料環境経済学</td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>3</u></td> </tr> <tr> <td>応用生命化学</td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>4</u></td> </tr> <tr> <td>農環境生物学</td> <td>平成 23 年度</td> <td><u>6</u></td> </tr> <tr> <td></td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>5</u></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>平成 23 年度</td> <td><u>20</u></td> </tr> <tr> <td></td> <td>平成 24 年度</td> <td><u>20</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>-----</p> <p><b>早期修了者数</b></p> <table> <tbody> <tr> <td>平成 23 年度</td> <td><u>3</u></td> </tr> <tr> <td>平成 24 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 25 年度</td> <td><u>1</u></td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td><u>2</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>-----</p> <p>※当該年度入学者のうち平成 27 年度末までに学位を取得し、修了した人数を示す。早期修了者は、当該年度入学者のうち早期（2 年または 2 年半）に学位を取得し修了した人数を内数で示す。</p> <p>（資料下部に注釈の追加）</p>	講座名	年度	入学者	食料環境経済学	平成 24 年度	<u>3</u>	応用生命化学	平成 24 年度	<u>4</u>	農環境生物学	平成 23 年度	<u>6</u>		平成 24 年度	<u>5</u>	合計	平成 23 年度	<u>20</u>		平成 24 年度	<u>20</u>	平成 23 年度	<u>3</u>	平成 24 年度	<u>1</u>	平成 25 年度	<u>1</u>	平成 27 年度	<u>2</u>
講座名	年度	入学者																																																											
食料環境経済学	平成 24 年度	<u>2</u>																																																											
応用生命化学	平成 24 年度	<u>5</u>																																																											
農環境生物学	平成 23 年度	<u>7</u>																																																											
	平成 24 年度	<u>4</u>																																																											
合計	平成 23 年度	<u>21</u>																																																											
	平成 24 年度	<u>19</u>																																																											
平成 23 年度	<u>2</u>																																																												
平成 24 年度	<u>2</u>																																																												
平成 25 年度	<u>2</u>																																																												
平成 27 年度	<u>3</u>																																																												
講座名	年度	入学者																																																											
食料環境経済学	平成 24 年度	<u>3</u>																																																											
応用生命化学	平成 24 年度	<u>4</u>																																																											
農環境生物学	平成 23 年度	<u>6</u>																																																											
	平成 24 年度	<u>5</u>																																																											
合計	平成 23 年度	<u>20</u>																																																											
	平成 24 年度	<u>20</u>																																																											
平成 23 年度	<u>3</u>																																																												
平成 24 年度	<u>1</u>																																																												
平成 25 年度	<u>1</u>																																																												
平成 27 年度	<u>2</u>																																																												
4	24-20 頁・資料 19	<p>《資料 19：就職状況》</p> <p>生産環境工学</p> <table> <tbody> <tr> <td>製造業</td> <td><u>52</u></td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td><u>6</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>応用動物学</p> <table> <tbody> <tr> <td>製造業</td> <td><u>70</u></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td><u>137</u></td> </tr> </tbody> </table>	製造業	<u>52</u>	その他	<u>6</u>	製造業	<u>70</u>	合計	<u>137</u>	<p>《資料 19：就職状況》</p> <p>生産環境工学</p> <table> <tbody> <tr> <td>製造業</td> <td><u>53</u></td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td><u>5</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>応用動物学</p> <table> <tbody> <tr> <td>製造業</td> <td><u>74</u></td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td><u>141</u></td> </tr> </tbody> </table>	製造業	<u>53</u>	その他	<u>5</u>	製造業	<u>74</u>	合計	<u>141</u>																																										
製造業	<u>52</u>																																																												
その他	<u>6</u>																																																												
製造業	<u>70</u>																																																												
合計	<u>137</u>																																																												
製造業	<u>53</u>																																																												
その他	<u>5</u>																																																												
製造業	<u>74</u>																																																												
合計	<u>141</u>																																																												

	頁数・行数等	誤	正
		応用生命化学 製造業 <u>115</u> 公務員 <u>5</u> その他 <u>14</u> 合計 <u>178</u>  農環境生物学 製造業 <u>79</u> その他 <u>9</u> 合計 <u>159</u>  ----- <div style="text-align: right;">合計 (%)</div> 製造業 <u>385</u> <u>51.1</u> 情報通信 42 <u>5.6</u> 卸売・小売 23 <u>3.1</u> サービス 61 <u>8.1</u> 公務員 <u>65</u> <u>8.6</u> その他 <u>53</u> <u>7.0</u> 大学院進学 67 <u>8.9</u> 合計 <u>754</u>	応用生命化学 製造業 <u>117</u> 公務員 <u>6</u> その他 <u>12</u> 合計 <u>179</u>  農環境生物学 製造業 <u>82</u> その他 <u>7</u> 合計 <u>160</u>  ----- <div style="text-align: right;">合計 (%)</div> 製造業 <u>395</u> <u>52.0</u> 情報通信 42 <u>5.5</u> 卸売・小売 23 <u>3.0</u> サービス 61 <u>8.0</u> 公務員 <u>66</u> <u>8.7</u> その他 <u>48</u> <u>6.3</u> 大学院進学 67 <u>8.8</u> 合計 <u>760</u>